

「絵本」受容過程に関する専門性の共有

—子育て支援のための実践教育を通して—

谷出千代子*・池田涼子*・伊東知之*・籠谷隆弘*・森 俊之**

*仁愛大学人間生活学部 **仁愛大学人間学部

Studies on Reception Processes of Picture Books

Chiyoko TANIDE* Ryoko IKEDA* Tomoyuki ITO* Takahiro KAGOYA* Toshiyuki MORI**

*Faculty of Human Life, Jin-ai University **Faculty of Human Studies, Jin-ai University

異学科学生に専門性を共有させながら、キーワード「絵本」に基づいてそれぞれの専門分野を展開し、実践可能なエリアで子育て支援のあり方を各教員と学生が模索しながら3年間の実践を重ねた。その中で次世代子育て予備軍としての学生たちは、どのように「絵本」を受容して子育て実践教育に資することが出来たか事後調査を中心に、実践学生群と非実践学生群の比較から検証した。結果、両群共に子育て支援の媒材としての絵本と、彼らが解釈する絵本の意味・位置付けが異なることが検証された。さらに、体験してきた過去の絵本観と子育て支援に資するための絵本観も体験の有無に関係なく異質であることも判明した。しかし、子どもとの接点、子どもに対する姿勢の在り方は体験の有無で差異が見られた。抛って、世相の流れのなかでブックスタート活動などの活発化から鑑みても、子育て支援の媒材としての絵本観、すなわち意味と位置付けを、学生を含めた子育て中の母親に対しても、その役割を解く必要性を明らかにした。

キーワード：絵本、子育て支援、次世代子育て予備軍、SOUL、人間関係の基礎

1. 問題の所在

当研究の目的は、子育て予備軍（親準備教育の対象となる若者）の「絵本」受容実態を解明することで、次世代子育て実践へのアプローチ、並びに、子育て支援の具体的改善を試みようとするためのものである。

この背景には次のような課題が提示されたことが先ず挙げられる。

（1）2000年「子ども読書年」推進会議にて紹介されたブックスタートは2009年11月末現在、全国1783市区町村のうち725市区町村（40.7%）の自治体にて実施されている。そして、秋田・横山ら「ブックスタートプロジェクトにおける絵本との出会いに関する親の意識」¹⁾（2002）や原・篠原「母親の乳幼児養育に関する調査：ブックスタート事業36ヶ月児を中心に」²⁾（2007）、山崎「公立図書館の乳幼児サービスと育児

支援」³⁾（2009）など、その効果を検証する数多くの研究がなされてきた。しかしその中で、親達の絵本の読み聞かせに対する負担感「毎日くたくたになる」や、「絵本を与えねばならないという義務感から、毎日読み聞かせをしていないと育児不安が生じる」といった意見が見受けられた。

そこで、親、特に母親の場合、絵本そのものに興味を持てなくて負担になるのか、読み聞かせという行為に対する負担なのかが育児支援の課題要因として検討すべき余地がある。

（2）幼児教育学科を保有する女子短期大学生の図書館利用にみる絵本貸出し数は表1の通りである。

全体の貸出ジャンル中の絵本の占める割合に大きな格差が見られる。幼児教育学科生では実習その他利用度の高率には必然性があるが、その他の学科生の絵本への興味関心率が極めて低いことが挙げられる。この

表1. 絵本貸出状況 (2004年度)

	生活科学学科		幼児教育学科		音楽学科	
	1回生	2回生	1回生	2回生	1回生	2回生
a.在籍者数(人)	243	229	179	178	42	31
b.総貸出冊数(冊)	2,822	2,667	2,394	3,118	650	845
c.絵本貸出数(冊)	53	3	545	1,010	9	1
d.絵本貸出c/b×100(%)	1.9	0.1	22.8	32.4	1.4	0.1

要因は何か、子育て予備軍においても、絵本への関心が希薄なのか、間接的に子育て支援への影響が懸念される。

(3) 吉見「大学を拠点とした子育て支援活動の展開と課題」⁴⁾ (2008) や川瀬「学生保育サポーター事業のプログラム評価」⁵⁾ (2009) などの実践研究に見られるような子育て支援の具体的実践を、幼児教育学科を有する当該教育機関でも2006年度から3年間事業を展開した。専攻分野の異なる学生達が保育サポート、特に「絵本」をキーワードに各専門教員と育児支援事業を展開していくなかで、絵本に対する受容態度や預かり保育に対する関心の度合いにも差異が生じた。それは専門分野の関係からか、絵本に対する観念的見方や価値観のずれなのか、究明の余地があると思われる。

以上のような問題点を背景として、「子育て予備軍」の絵本に対する関心度の様相を「子育て支援事業ワークショップ」に関った学生の実態から検証しようとするものである。

2. 事業概要

ワークショップの実践概要は次の通りである。

(1) 事業名称 「お父さん、そして家族のためのおもしろ絵本学講座」として実践した。

(2) 基本姿勢 「絵本」をキーワードに、デザイン・情報管理・調理学・栄養学・幼児教育・音楽の各専門分野を生かしたワークショップをそれぞれ企画実践に移した。

(3) 参加対象 福井県内全域に新聞・テレビを媒体に報道すると共に、短期大学の立地場所を中心に保

育所・幼稚園・地域公民館へチラシの配布による広報活動を行った結果、自主的に参加した子育て中の父母、またはその家族を対象とした。

(4) 実施期間 2006年度～2009年度の3ヵ年。

各年度6ヶ月から10ヶ月間に渡るプログラム構成にしたがって継続開催した。

(5) 学生募集 アシスタントとしての対象学生は、短期大学1・2回生とし、学内掲示、チラシの配布、指導学生等への口コミによって募集した。学生の活動は2分野に分け、それぞれに活動内容を明示して募集を行った。

(6) 学生の活動内容

①参加者に対し専門分野を生かした制作・実技・実習の補助を担当する。

②参加者が受講中に、乳幼児の預かり保育を担当する。

参加学生数は表2のごとくである。

(7) 担当教員 生活環境1, 情報管理1, 調理学1, 食物栄養1, 幼児教育2, 音楽1 計7名(3年目2名の異動で指導者交代。あとは3ヵ年継続者)である。

当該表の()内の数値は、保育を希望した学生数(内数)である。また、重複参加学生数23名(幼児教育学科20名・音楽学科3名)で、重複回数はいずれも2回であった。

3. 手続き

(1) 調査法 アンケートによる調査

プリコード回答法(単数・複数回答法)、及び5段階評価法を併用した。

(2) 調査対象 ①ワークショップ事業の補助学生281名、回答数232(101)名、回収率82.6(87.1)%,

②参考のために、ワークショップに関心が薄く意思表示をしなかった学生56名(生活科学20, 幼児

表2. 3ヵ年子育て支援事業の調査対象学生数の推移

(単位: 人)

実施年度	生活科学学科		幼児教育学科		音楽学科		合計		備考
	参加学生	不参加学生	参加学生	不参加学生	参加学生	不参加学生	参加学生	不参加学生	
2006年度	41(9)	11	44(29)	11	5(0)	4	90(38)	26	大学施設への 集客型
2007年度	52(10)	9	53(31)	16	7(1)	5	112(42)	30	
2008年度	21(3)	0	52(33)	0	6(0)	0	79(36)	0	地域への出前型
計	114(22)	20	149(93)	27	18(1)	9	281(116)	56	

教育27, 音楽9) についてもアンケート調査を実施した。

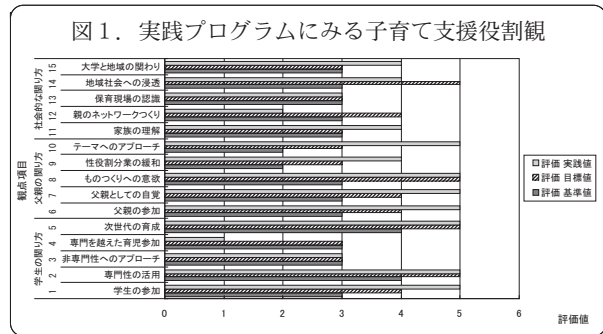
(3) 調査期間 ①3年間それぞれの担当分野の実践終了後配布, 1日～1週間以内に回収。上記調査対象の②については2007・2008年度のみ当該年度の2月に実施した。

(4) ワークショップ内容

- ①写真絵本を作ろう (PCで写真データを取込み, 紙媒体で印刷製本する)
 - ②アニメーション絵本を作ろう (簡易ソフトを使ってお絵かきとCDタイプの絵本製作をする)
 - ③絵本のお料理を作ろう (絵本に登場するメインディッシュからデザート, 飲み物まで調理, 試食をする)
 - ④絵本を通して学ぶ食べ物とからだの関係 (栄養学的視点に立脚して, 講義と簡易布はり絵の絵本制作をする)
 - ⑤絵本の美術的鑑賞 (絵本の構図, 画材, 画家の思想性まで分析鑑賞をする)
 - ⑥飛び出す絵本作り (造形としての飛び出す絵本の製作をする)
 - ⑦絵本でつなぐ親子の絆 (絵本分析から親像・子ども像を確認しながら, 読み聞かせ・読み合い・群読を実践する)
 - ⑧絵本にあわせて音楽を作ろう (日常生活用品から音を作り, 1冊の絵本の読み聞かせのBGM制作をする)
 - ⑨ミニコンサート—子ども達とクラシック— (サンサーンス「動物の謝肉祭」など映像化されている作品の演奏を聴いたり, トルコ行進曲など耳慣れている曲に親や子ども達が手拍子・身体表現・楽器でリズムを合わせたりして, 曲を楽しむ)
- 以上の内容で実践した。

4. 結果と考察

図1は9名の指導者が事業企画の段階における基準値に対し, 実施直前の目標値 (仮説) として掲げた評価, そして, 実際に実践過程や実践結果の調査に基づいた評価を示したものである。

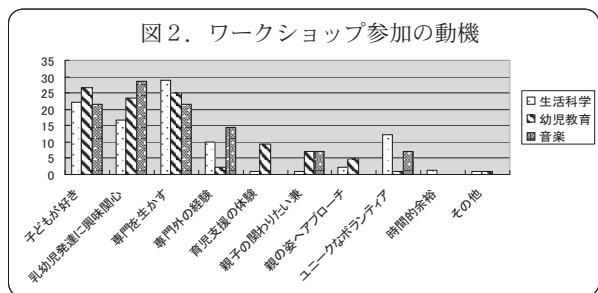


学生の関わり方における専門性を超えた育児参加が1と, 目標値よりも予想外に低い値の結果となったことが明瞭である。

そこで, 学生のワークショップに対する姿勢について検討する。

(1) ワークショップ事業参加の動機について

図2にて明らかなように, 10の選択肢に対してどの学科学生にも共通しているのが母性的側面を反映させている「子どもが好き」「乳幼児の発達過程への関心」をもつところが確認できる。次いで「専門性を生かす」ことへの関心が高いのは, 募集の段階では専門分野ごとに事業実践の展開法が異なることを認識していないので, 単純にキーワードの「絵本」に注目の度合いが集中したとも考えられる。



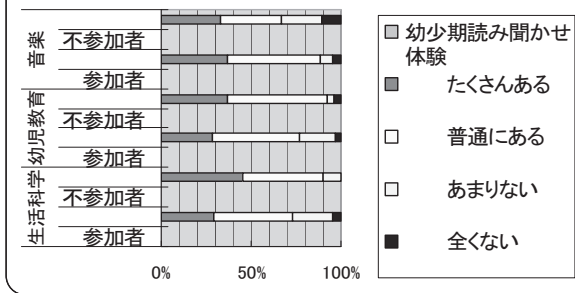
「専門外の体験」, および「育児支援の体験」では, 幼児教育学科学生は当該ワークショップを自分達のメイン活動として認識しているのに対し, その他の学科生の10%前後の反応については, 他学科の専門性に対する興味関心の高さを示す結果といえよう。

それぞれ「絵本」という言葉からくるイメージが参加学生の動機付けを左右したと考えられる。

(2) 絵本体験の有無

学生の絵本体験の経緯を比較する。図3では幼児期の絵本体験を参加・不参加学生の追体験から検証した。いずれも大幅な格差はなく, むしろたくさんの絵本体

図3. 絵本体験の過去



験をしているのが不参加者に目立つ。さらに専攻別からみても、幼児期の絵本体験がその後の専門性に影響を及ぼしたような数値は見られない。幼少体験がその後の興味や進路に影響を与えるとは考えられないことである。

図4においても、現在の絵本体験が専門性を左右するとも考えにくい。ただ、学科の特性が大きな差異につながったのは止むを得ないことである。幼児教育学科学生の実態として、教育・保育実習や授業における実技体験、教材としての扱いなど絵本と多く関わる環境にあることがより鮮明に、かつ大きな位置づけになったといえる。

したがって、専門性よりもむしろ絵本に対する個々人の感覚の異質性から生じた実情も考えられる。例えば、生活科学学科にあっては生活環境専攻、生活情報専攻の学生達はデザインの視点から、またアニメーション制作から絵本やそれに近似した素材を身近に扱っていると思われるし、ゼミ中の素材選択でも話材として取り上げられることは確かである。

いわゆる、個人個人の絵本や保育、育児支援に対する関心の度合いが、次の行動に繋がるか否かに連動するといえよう。

(3) ワークショップ体験の事前事後

図4. 絵本体験の現在

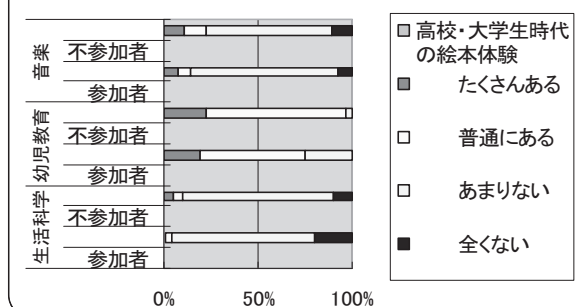
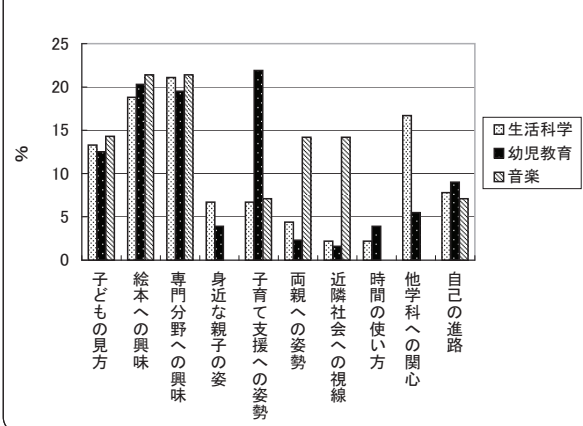


図5. ワークショップ体験の事後



ワークショップに参加した学生の体験後の変化について10項目の選択肢による選択結果が図5である。

X軸左から、①子どもの見方、②絵本の見方、③専門分野への関心、④身近な人間関係への関心、⑤子育て支援への姿勢、⑥両親に対する姿勢、⑦近隣社会への目の向け方、⑧時間の使い方、⑨他学科（他専門分野）への興味関心、⑩自己の専門性再確認の項目それぞれについて、すべての学科学生に共通して好結果が出たことが挙げられる。

現在、自分が専攻している専門性に関して、再確認、再認識、再挑戦がなされたことが判る。さらに、入学後専門の学科で与えられた課題の消化に何の疑問も感じず、無条件で参加していたことについて、自らの姿勢を問う結果となったことも確かである。

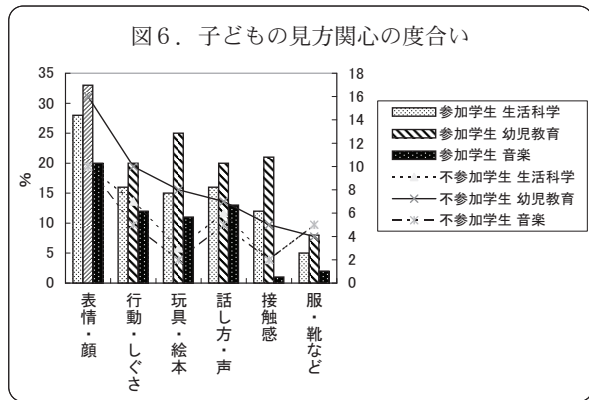
他学科の専門性に触れることや、他学科の学生と専門知識を共有することで、新しい発見や反省があったと想定できる。特に生活科学学科生において変化が多くみられた。

絵本への興味も具体的体験をして深まったことも判った。しかし、実践過程における絵本への関心は高いものの、詳細な絵本の列挙や作品名の列挙など、その後の絵本へのアプローチには高率が見られない結果となった。この点では学科の特異性がみられ、幼児教育学科生は作品への関心があることが判明した。

(4) 子どもに対する視線と姿勢

乳児・幼児期の子どもに対する意識における目線の変化をみると、図6のごとくである。

X軸について、①子どもの顔・表情、②子どもの行動やしぐさ、③子どもの身の回り品、④子どもの声・



話し方、⑤子どもへの接触感、⑥子どもの服装・履物・髪型などへの関心度の変化である。

幼児教育学科生に変化が大きく、特に参加学生と不参加学生の差異が生じたのは、子どものしぐさ、声や話し方、接触した際のソフトな感触であった。外見より体験に基づく内面的子ども観の体得に影響したと思われる。体感としての子ども感が表面化したともいえる。

このように、数値的には些少であるが、学生として短時間の育児体験から周囲に目を向け、近隣に戯れる子ども達への視線や姿勢が変化したことは、以後の保育者、母親としての道標になり、重要視すべきことと考えられる。

体験時間としては、1回3時間程度で、同一エリアにいただけであるが、環境を変えること、相互の視線や言葉かけ、行動に触れることがこうした大きな変化への手がかりになったと考えられる。共有や発見の姿勢が見えてくる。

それは母親業に専念している人たちにも共通することではないかと思われる。日々何の疑問も持たず、与えられた環境（育児）に順応することに専心して、気付いたときには一人の人間として、興味関心のエリアや度合いの格差に驚愕し、自己不安を招き、自信喪失につながることもあり得ることだと思ふ。

この時点で考察できることは、母親、学生ともに、人的環境の変化、無理なく理解し体験を共有できる環境の整備が、彼女らの子育てに対する興味や関心、さらに不安への要因解消にも繋がるものと考えた。次世代子育て実践者として子どもに対する視点や姿勢の高揚のためにも有効な実践であると判断した。

(5) キーワード「絵本」への反応

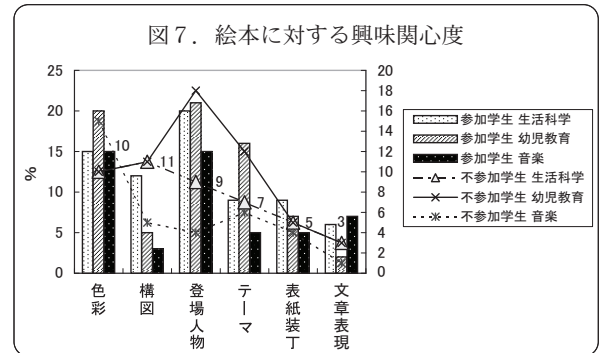


図7のX軸の項目は、①絵本表現の色彩、②全場面の構図、③絵本の登場人物、④物語のテーマ、⑤絵本の表紙、⑥文章表現のリズムの順で、その関心の変化をみたものである。

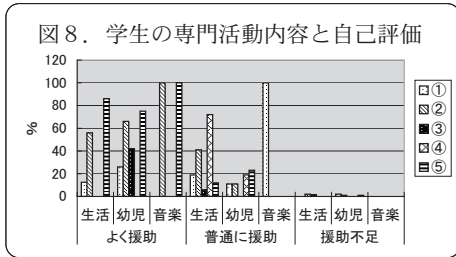
参加学生すべてが、絵本の色彩と登場人物への興味に高まりを示している。さらに、不参加学生の差異が顕著な項目も同様に色彩と登場人物の項目である。また、参加、不参加を問わずすべての学生が注視したのが絵本全体の表紙装丁である。

これらの項目はいずれも、絵を主体に描かれている絵本の表現要素を示す重要なファクターである。参加した学生が揃ってこれらのファクターに高率を示すことは実践教育の効果といえよう。視点を替えれば、不参加学生にあっては、これらの要件に高低の格差が生じたことから、より実践教育の効果や重要性を裏付けたことになろう。

ただし、いずれの学生もそれぞれの絵本のテーマや文章表現に関心が希薄なことが判明した。絵本の持つ役割・使命を視野において選択するならば、これら付帯条件により積極的に変化が欲しいところである。

母親のなかでは親と子のコミュニケーションを図るための媒体として「絵本」が位置するのだから、むしろ絵に関心度が高いほうが話題性に富み、読み聞かせの楽しさなども深まって効果的であろうし、前述の負担感に対する影響は少ないと思う。むしろ重いテーマを希求し続けて読み聞かせる親の方が、子ども自身の負担も過重となりやすく、本嫌いへと誘うことになり兼ねない。

保育者という立場では教育的配慮も加味し、美しい言葉や社会性への導き、人間関係の気づきなどのために絵本利用に立脚することも必要と思われる。幼児教育学科生だけの役割としてではなく、子育て支援とし



て位置づけた当該実践教育の場合、これらは課題として今後解決すべき要素と考える。

(6) 子育て支援と専門性の関係

ジェンダーフリーの立場で女子学生達の参加を意図した企画で、「絵本」に焦点を絞り次世代の子育て教育を含めた子育て支援に対する実践教育（ワークショップ）を行った。その結果、果たしてこれらの活動は彼女達に有効的であったか否かについて検証する。

図8では、①から⑤までの項目について、参加学生が自己評価したものである。前述の通り、参加学生募集の条件として、専門的実践活動を地域子育て中の家族に伝達援助する型と専門性とは別に子ども達の保育を通して援助する型との2パターンを提示した。

参加人数の割合は表2の通りであるが、そのいずれの型も問わずに積極的に自己の使命を果たせたか否かに着目して調査したものである。

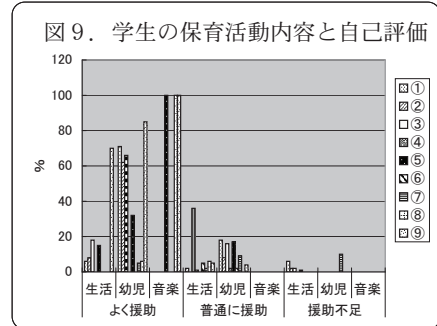
結果は明確で、自信を持ってそれぞれの立場で達成感を味わうことが出来たと解釈した。

中でも⑤の後始末がいずれの学科学生においても第1位であった。簡単なことのようにだが、学外者と接する上で必須要件である。

第2に、活動の主軸にある専門性を生かした活動の援助が出来たことを掲げている。自分の専門を生かせることが出来た満足感、専門性を生かすことに自信がついたこと、就職活動における自己表現として伝えられることなどが、学科共通に記述されていた。

第3に、活動手順の説明が出来たこと。これはおよそ20%近くの学生達が回答した。専門的活動を言葉で表現するため、より深く広範な情報の理解と認識力が要求されるので、確固たる日常の教育の成果と捉えたい。

第4に、子どもを見守る姿勢が見られたことである。保育の原点ともいえる「待ちの姿勢」「静かに見守る」ことの実践である。コミュニケーションの原則としての大人側の姿勢 SOUL、竹田氏の提唱する「INREAL



（インリアル）」⁶⁾で① Silence, ② Observation, ③ Understanding, ④ Listening を実践できたことである。

性急に声かけをしてしまうのではなく、家族や子ども達の行動を見守り、参加家族の思いを、要求を、しっかりと受容できる姿勢を保持していったことになる。地域社会の人々に強い関心を示す学生の声にも手応えを感じた。

これらの活動を通して、個々の学生が緊張しながらも自らを律し、叱咤激励して行動を起した力は、机上の学問とは違った意味で大きい力になったと思う。

(7) 子育て支援と保育活動の関係

図9が保育活動に対する活動実践の自己評価である。

子どもと接する体験の有無は次世代の子育て世代に不可欠の体験であると思う。育児放棄、幼児虐待など一般化してしまったこれらの用語の背景には、兄弟数の減少、地域社会での異年齢集団の活動不足、親育ちの不完全状態、競争社会が生んだ点数主義など、無防備な子育て環境がある。それらを想定しながら実施した結果は、幼児教育学科の学生は別として、予想通り、子どもを遊ばせられないことが分かった。①絵本の読み聞かせ、②玩具遊び、③折り紙・お絵かきなど、それほどの技術を要しない活動が不得手であることが明らかになった。

(6) 前述のごとく後始末はいずれの学科生もよく実践消化していることは望ましいと思う。また、幼児教育学科生は1項目を除いて、いずれの分野でもほぼ保育活動に自信を持ったことも分かる。そして、幼児教育学科生も含め、学生の立場、経験値から考察すると、⑦家族との対話が低率を示す結果に至ったことも納得できる。アルバイト等で対人関係の構築は出来ていると判断したのは大きな誤りであった。店先で対応する

人的環境と、保育する立場で関わる人的環境の相違を
みることが出来た。

換言すれば、学生を養成する立場で考慮すべきこと
は、こうした人間関係にみる望ましいコミュニケーションの
とり方を導く必要性を痛感した。

5. まとめに代えて

以上の調査分析結果から、次世代子育て予備軍の子
育て支援方法に関して、「絵本」を主軸にした実践で
は、次のような点が見出された。

(1) 次世代子育て予備軍では、「絵本」への興味関
心と、子育て支援材料としての絵本との繋がりが薄い。

(2) キーワード「絵本」は、子育て支援のための素
材として広範なジャンルに展開できるが、具体的保育
実践のためには、再度学習の機会が必要である。

(3) 本来の絵本は今日的文化環境の中で、一つの素
材としては簡便で扱いやすく、短時間でマスターでき
る素材であることは立証できた。

(4) 絵本やそれに類した素材は、視覚的に受容しや
すい特性をもち、広い年齢層に対応できる。しかし、
保育者養成機関として次世代子育て予備軍には、それ
らの役割を再認識させる必要性を感じた。単なる玩具
的素材として絵本という認識に留まり、発展性がない
という要素が濃かった。

(5) 主題から関連して、次世代子育て予備軍には、
言葉を通して作り上げる望ましい人間関係構築のため
のコミュニケーション手法と、その原理のワーク
ショップが不足していることを認識した。
単なる「絵本」だけを素材にして分析しても認識でき
る結果となった。

参考文献

- 1) 日本保育学会大会研究論文集 (55), 166-167, 2002
- 2) 福岡女学院大学紀要. 人間関係学部編 8, 73-82, 2007
- 3) 山梨大学看護学会誌 7(2), 1-4, 2009
- 4) 愛知県立看護大学紀要 14, 113-120, 2008
- 5) 宮崎公立大学人文学部紀要 16(1), 45-62, 2009
- 6) 竹田契一・里見恵子編著『インリアル・アプローチ』
日本文化科学社 109-110, 1994